

『昔々日本』が照らす未来

鈴木励滋（演劇批評／地域作業所カプカプ所長）

2017年3月

「演劇系大学共同制作 2016 新進劇作・演出家の作品上演、関連ワークショップ、シンポジウムによる演劇人育成事業 記録集」初出

「演劇系大学共同制作」という企画で、学生たちが創作のプロフェッショナルの仕事に触れる影響の計り知れなさ。それは、この先舞台関係の職に就きたい人たちにとって、またとない研鑽の機会となるのみではなく、彼や彼女が生きていくうえで、かけがえのないものとなるはずだ。こんな世の中だからこそ。

そう、若者たちの目の前にはもう希望に満ち溢れた世界は広がってはいない。今回、作演出を託された範由遊泳の山本卓卓（すぐる）もアフタートークで言及していた、相模原の「津久井やまゆり園」事件のようなことが起こってしまう現実社会。こんな世の中において舞台表現は何ができるのか。これまでも自らの作品に「凶悪事件」を度々取り上げ、自分の表現は何をなしているのか問いつづけている山本にしか作れないあるシーンとある台詞から、学生たちに手渡されたものについて考えてみたい。

舞台奥側には横 8m×高さ 6mほどの大きなスクリーンが下りていて、その前には八百屋の陳列棚のように手前に向かって傾斜のある舞台がしつらえてある。スクリーンには東京芸術劇場の前の公園でたたずむ人々が映し出されている。そこには「4時からパフォーマンスがあります」とキャプションが付いている。

舞台には映像の中の人々が同じ衣装で出てきて、誰かを待っていたり、いつ撮られたのかよく判らない不思議な映像の中の自分を眺めたりしている。その中の一人、長身の青年が、唐突に「バス！ まだ来ません、はい、カズくん、バス、はい、4時、10分です、はい」と大きな声を出す。どうやら彼は発達障害があるようだ。その後も、冷蔵庫のドアを開けっ放しだと真っ黒い目が入ってくるから閉めておかないといけないう旨を、周りの人たちに訴えもする。その「カズくん」は女性のカバンのチャックが開いているのが気になって、強引に閉めようとして払いのけられ、転がる。そこから彼は胸の前に祈るように手を組み、鉛筆を転がすみたいに傾斜をコロコロと転げおちる。下まで行くと上まで登り、繰り返してコロコロと転げおちる。

「ああいう人から世界ってどう見えるのかね」と冷たい視線を送る人々の中で、いかにもお調子者な青年が便乗して転がることで風景は一変する。人々は「これ絶対パフォーマンスでしょ、これ演劇はじまってるよ」とか「やらない方が恥ずかしいやつじゃん」と嬉々として次から次へと連鎖的に転がり始める。そして、それを観ているわたしも、「それいけ、もっと行け」と心の中で喝采していたのだった。

現実の世の中ではまことに残念なことに、このわたしも含む多数派から異質と見なされるものは矯正され、それでも許容範囲に収まらないものは世間から排除される。差異があるというだけで理不尽にも「異常」とされる人々の方に変ることを強いるのではなくて、山本はもの見事に世界の価値観の方を拡げて見せてくれた。

ここに、わたしたちの可能性がある。

コロコロに客席も沸いたのだが、それは、自分の中にもある“異質性”を、普段は社会性とか何とかいって押し殺しているその部分を、許される気がしたからではなからうか。その反応は、差異がある者がその差異のせいで排除されることのない世界を実現させるために、いかにフィクションが有用であるかを証明していた。

「4時からパフォーマンスがあります」という真偽の定かでないキャプションが、大抵は「奇行」と処理されるであろうコロコロを、フラッシュモブかなんかと勘違いさせ、結果的にあの場で「カズくん」は排除されなかった。

けれど、そもそもなんで「カズくん」は排除されなくてはならないのだろう。そもそもなんで19人もの生命は否定されねばならなかったのだろう。あれはほんとうに一部の「異常」な人間の壘行なのだろうか。ほんとうに猿だけが悪者なのだろうか……

『昔々日本』では、三人姉妹と姉のつれ合いの物語と、母を殺した猿への敵討ちの昔話『猿蟹合戦』が併走する。二つの物語は交錯し、猿への報復の段でそれは都内で起こった「武装集団による無差別テロ事件」として混濁していく。それゆえ、本来の『猿蟹合戦』のように勧善懲悪の物語として大団円を迎えることはない。

『猿蟹合戦』とは異なり、蟹や蜂や白たちは復讐を咎められ裁かれる。加害者と被害の線引きは揺らぐ。善悪さえも揺らぎ、

観客は罪とは何かと問いかけられることとなる。

そして極めて「普通」の人間として描かれていた三人姉妹の長女の、いわゆる幸せな結婚をした相手の高校教師が痴漢の容疑で逮捕される。面会に行く途中でパニックになった彼女には、下りのエスカレーターで行く手をふさぐ女性を蹴落したいという真っ黒い感情が湧く。だが、彼女は女性のカバンに妊婦であることを知らせるタグを見つけて我にかえり「やったかやってないかは問題じゃなくて、もう、思っちゃった時点で、私はもう人間じゃない」と自らの罪を責める。

長女の倫理観が厳格すぎると戸惑った向きも少なくないのではないかと。だがこれは倫理の問題ではないし、明らかにこの台詞は、この国のいまを生きるわたしたちを揺さぶるためにかなり意図的に仕込まれたパンチラインだ。

このような事件の際に必ず沸き起こる、殺してしまった人たちがいかに「異常」であったかを印象付けようとするテレビの喧伝は、その人たちと自分とは違うのだと言い聞かせたいわたしたちの要望を映し出している。長女の煩悶はそれを明るみに引きずり出す。いったいなぜゆえそんなことをするのだろうか？

自分が排除されないためにも、主流の人々の役に立つつもりで彼は 19 人を殺してしまった。そんな曲解をされてもと困惑するかもしれないが、差異があることに不寛容な空気を醸成しているのがわたしたちではないと果たして言い切れるのだろうか。山本は『少女 X の人生で一番楽しい数時間』や『となり街の知らない踊り子』といった作品で、一貫してそのような空気を自らの問題として描いてきた。彼は倫理を振りかざし棚の上から「正しさ」を説いているのではない。自分の中にもある真っ黒いものを認めることで、自らの問題として立ち向かおうという地平が、山本卓卓という創り手の闘っている場なのだ。長女のあの台詞を通して山本は、「カズくん」がいてもよいのだということ、あの 19 人が殺されなくてもよかったんだということ、どうかどうか、他人事としてではなくて、わたしたちの問題として証明していこうと呼びかけているのではないかと。

『昔々日本』は、わかりやすいハッピーエンドをもたらしもせず、唯一の「正解」を与えてくれもしなかった。けれど学生たちは、各々が世の中や歴史に関わっているという自覚と、ならばこの自分を変えていけるという手応えと、そのために用いることができるフィクションの力を授けられた。

この先、舞台関係の仕事をするとしても、そうでなかったとしても、一人ひとりがそれぞれの場所で自らの物語を紡いでいけるよう、大きなものを手渡されたわけである。山本は自らが歩む道を余すところなくさらけ出し、学生たちはそれに応えた。誰も殺されなくてよい、そして誰にも殺させもしないような未来の日本に向けて。

ラストで舞台上の人々は一人ひとり倒れ、折り重なり一つの大きな塊になっていく。ふたたび現れた後方のスクリーンの中の彼や彼女は、冒頭とは異なり客席を睨みつけている。死んでしまったかに思われた人々もゆっくりと起き上がり、映像の人々同様に強いまなざしを客席のわたしへと向けてくる。まるで「じゃあ、あなたは どう生きていくの？」と問うているかのよう

